

後志利別川流域懇談会からの提言



後志利別川流域懇談会からの提言

平成 17 年 10 月 27 日

後志利別川流域懇談会

委員長 黒木 幹男

後志利別川は、道南でも有数の穀倉地帯を流下する河川であり、その清らかな流れは、人々の生活・地域の産業を支えるとともに、川との触れ合いによる生活の中での楽しみや、憩いの場として非常に重要な役割を果たしてきました。

その一方で、下流低平地においては、慢性的に内水被害が頻発しており、早急な対策が求められています。また、清流河川として高く評価される清らかな流れと、その周囲の豊かな自然環境を備えていることから、このような環境を維持していくことで、地域の個性や魅力を高め、次世代へ継承していくことも必要となります。

後志利別川流域懇談会では、学識経験者、地元市町村代表、オピニオンリーダー、農業関係者、漁業関係者、林業関係者、教育関係者から幅の広い議論を 7 回にわたり行い、「清流づくり」をテーマとし、治水、水質、自然、利用、地域活動の 5 つの柱ごとにそのあり方を検討するとともに、流域連携の重要性を河川整備計画に対する提言としてまとめました。

今後、河川整備計画の策定に向け、下記の提言を反映させながら、地域住民と連携した清流づくりを推進することを強く希望するとともに、これらの取り組みが、流域一体となって発展し、更には次世代を担う子どもたちへ繋がっていくことを望みます。

提 言

1. 安心で安全な清流づくり（治水）

後志利別川では、過去に洪水、地震被害にあった経験を持っており、現在でも内水被害が頻発している。これらの被害から安全な生活を守るために、水利用と自然環境とのバランスを保ちつつ水害のない川づくりを考えていくことが必要である。

2. 清流日本一を目指す清流づくり（水質）

後志利別川は、過去 8 回清流日本一に輝いており、地域の誇りともなっている。今後とも、この清流を維持・保全していくためには、住民一人ひとりの意識向上をつなげ、流域一体となった取り組みを推進していくことが必要である。

3. 豊かで潤いのある清流づくり（自然）

「海・山・川」のつながりを大切にし、里山・里川・河畔林など、清流を育ててきた豊かな流域環境については、様々な取り組みを通して、保全を図る必要がある。

4. 心にのこる清流づくり（利用）

子供からお年寄りまでが川に近づき、川で学び、水辺で遊び、憩いの場として活用することができるようにするとともに、後志利別川ならではの原風景を保ちつつ、心に残る川としての整備を進めていくことが必要である。

5. 誰もが知り、関わっていく清流づくり（地域活動）

地域住民が後志利別川に対し身近な川としての意識を持ち、さらには、イベント等での活用機会を高めるとともに、後志利別川の清流のすばらしさ、清らかな水に育まれた農産物・水産物、地域の活動など、様々な情報発信・PRを行っていくことが必要である。

以上、後志利別川の清流づくりに向けた上記 5 つの取り組みを流域全体で積極的に継続・発展させ、次世代を担う子どもたちの川に関わる学習・体験をとおり、清流づくりを地域で繋げていくことを強く望むものである。

後志利別川流域懇談会委員名簿

（敬称略 五十音順）

氏 名	所 属 ・ 役 職	専 門 等
秋 元 壽	NPO法人「後志利別川清流保護の会」 会長	オピニオンリーダー
阿刀田 光紹	社団法人 北海道栽培漁業振興公社 技術顧問	魚類
五十嵐 淳一	今金小学校 校長	教育関係者
井 上 京	北海道大学大学院農学研究科 助教授	地域環境学・土地改良学
内 田 尊之	北部檜山建設を考える会	オピニオンリーダー
内 田 東一	元北檜山町長	地元市町村代表
大 口 義孝	釣りクラブ平会 桧山林業グループ協議会 会長	オピニオンリーダー
黒 木 幹男	北海道大学大学院工学研究科 助教授	土木工学・河川工学
斎 藤 誠	ひやま漁業協同組合 理事	漁業関係者
佐 藤 理夫	市立函館博物館 五稜郭分館長	鳥類
鈴 木 幹男	狩場利別土地改良区 理事長	農業関係者
外 崎 秀人	今金町長	地元市町村代表
竹 内 正夫	瀬棚郡内水面漁業協同組合長	漁業関係者（内水面）
千 葉 美辰	北海道森林管理局 渡島森林管理署長	林業関係者（国有林）
辻 井 達一	財団法人 北海道環境財団 理事長	植物
寺 崎 康史	今金町教育委員会 学芸員	考古学
平 田 泰雄	元瀬棚町長	地元市町村代表
棟 方 明陽	元北海道教育大学函館分校 教授	昆虫類・底生動物
森 勝 典	元今金森林組合 参事	林業関係者